

ウラオモテ 遺伝子

さくら
櫻いいよ / 著
モゲラッタ / イラスト

目次

- 1 オモイデ初恋^{ほろこい} 004
- 2 フケザツ関係^{ぐんけい} 046
- 3 トモダチ恋心^{こいこころ} 089





4 ヤキモチ交差^{こころさ}

133

5 ウラオモテ遺伝子^{いあんし}

170

エピソード

212

1 オモイデ初恋

あの子の涙は限りなく透明に近い、きれいな水色だった。

その涙をぬぐうのがわたしの役目だった。涙でうるんだ目につこりと笑う少年。右目の泣きぼくろが、とてもよく似合っていた。

「楓ちゃん、ぼくは——」

リングのように赤い頬と、ゆらゆら揺れる瞳。

ああ、なんてかわいいんだろう。

ああ、なんて——





「楓！ 頼む！」

春休み最後の木曜日、午後四時半の体育館。バスケットボールが床を跳ねて大きな音を鳴らす。楓は飛んできたボールを両手でキャッチして、ジャンプすると同時に放つ。ボールはきれいな

弧を描いてゴールネットを揺らした。

よっしや、という声と、えー！ という叫び、そして下校のチャイムが流れる。

「ナイス、楓」

はあはあと肩で息をしながらボールを拾いにいくと、幼稚園からの腐れ縁であるカズが隣に並んで楓の肩をぼんつと叩いた。

「当然じゃん」

「今日五回もシュートミスつたくせに」

うるせえなあ、と笑って言いながらカズにボールをほいつと投げ渡した。

「あーまた負けたあ。楓がいると絶対そっちが勝つもんなあー、ずりい」

「お前らが女はチームにいらねえって言ったんだろー、ざまあ」

負けたチームの男子たちが口を尖らせながら通り過ぎていく。それに向かつてふたりはケラケラと笑った。

「気を遣って楓のこと女だと思つてやってたのによー」

「大きなお世話だつっの」

「お前、本当に女かよー」

言葉だけを聞けばかなりの暴言だなあとと思うけれど、男子にこうしてバスケットで認められることに、楓は悪い気はしなかった。女だからと仲間に入れてもらえないよりはよっぽどいい。

昔から三つ年上のお兄ちゃんとはバスケットをして過ごしたので、女子が相手だと少し物足りないのだ。部活のあとに、こうして男子に混ざって思い切りミニゲームをする時間が一番好きだ。

タオルで汗を拭きながら外に出ると、春の風が楓の肌を撫でて通り過ぎ、心地よく感じた。

カバンにつけているキーホルダーの鈴が、ちりんと小さく不格好な音で鳴った。

「楓ー！ 帰ろー」

ちようど校舎から出てきた智香がぶんぶんとして手を振りながら近づいてくる。美術部の智香も下校時間ギリギリまで絵を描いていたらしい。肩まで伸びた髪の毛に絵の具がついている。

「また男子とバスケットしてたんでしょー。あ、ほらTシャツで汗を拭かないで！ お腹見えるで



しよ！ 明日から中学二年生になるんだよー！ もうちよつと女の子らしくしなきや！」

近づいてきた智香はぶくうつと頬を膨らまして楓を怒る。

智香は背が小さくかわいらしいが、まるでお母さんかお姉さんのように、ガサツな楓を毎日叱る。正直言うとお母さんより口うるさくて怖い。

「はあい」

肩をすくめると、カズが「また怒られてやんの」と歯を見せる。

三人で校門に向かって歩くと、視界の端に校舎の隅っこでウロウロしている女子がいるのに気がついた。見かけたことのない人なので先輩だろう。見るからに困っている様子に、楓はすぐさま駆け寄っていく。

「おい、楓！ またかよお」

カズが後ろで呆れたように言うのが聞こえたけれど、無視して声をかける。

「どうしたんですか、センパイ」

振り返った女子の顔は、今にも泣きそうなほど歪んでいた。

「大事なストラップをなくしちゃって……」

「んじゃ一緒に探しますよ。このへんで落としたんですか？」

そう言いながら、楓は草むらにずぼっと手を入れて覗き込む。途中、腕にピリツとした痛みが走ったような気がしたけれど、気にせずにいろんな場所を探し続けた。智香とカズは顔を見合わせる。見つかるまで、楓は帰ろうとしないだろう。それならば協力したほうがいいと、一緒に探し始めた。

「ありがとう！」

四人で協力して探し始めてから十五分、無事彼女のストラップが見つかった。植木の枝に引っかかっていたのを楓が見つけたのだ。

差し出したストラップを先輩が受け取る。その手にはいくつもの小さな切り傷があり、血がじわりと浮かんでいた。

「センパイ、血が……」

「え？ あ、ほんとだ。葉っぱでいつの間にか切れちゃったみたい」

肌にしむ赤い色。それを見た瞬間、楓は血の気が引いてくらりとよろめく。

「どうかした？」

「あ、いや……大丈夫です。ストラップ、見つかってよかったですね」

「うん、本当にありがとう！」

必死に笑顔を向けて、立ち去っていく先輩の背中に手を振る。その姿が見えなくなった途端、楓は膝に手をつけて、はあーつと息を吐いた。今の自分の顔はきつと真っ青だ。

「ほんと、血がだめだなあ、楓は」

「だって痛そうじゃん」

「楓のほうが血出てるくせに」

カズに言われて自分の腕を見ると、先輩よりも大きな切り傷があった。けれど、自分の怪我や血はまったく気にならない。だって自分でどれほどの痛みかわかる。でも、他人の血はものすごく痛そうに思えて苦手なのだ。もしも、だらだらと流血している姿なんて見てしまったら即行倒れてしまうだろう。

激しくなった動悸を深呼吸をして落ち着かせる。

「本当に楓は世話焼きだよねえ」

隣の智香がそう言いながら楓の頭についた葉っぱを払った。

「まあまあ、見つかつてよかったじゃん」

「そうだけどー」

「なあ、早く帰ろうぜ。オレ、今日見たいテレビがあるんだから」

「近道して帰れば間に合うって」

「近道って、また塀を乗り越えるつもりでしょ！ もう！」

よかれと思つて口にしたら、また智香に怒られてしまった。

「いつも智香と一緒にいて散々怒られてんのにこれだもんな。楓が女らしくなることなんて空から槍が降ってくるくらいありえねえよなあー。いつそ明日から学ランで学校来たらしいんじゃない？」

「カズくん！」

けけけ、と隣で笑うカズを、智香が一喝する。

いつもお団子頭で女子にしては背が少し高く、口調も態度も男勝り——髪の毛が長くなければ男の子にまちがわれそうだ——の楓。お調子者で楽しいことが大好きな、男子の中でも目立つ存在のカズ。そして小柄でふわふわのボブに大きな瞳というかわいらしい見た目に反して気が強い智香。

三人は幼稚園からの幼馴染で、登下校はいつも一緒だった。

いつものように家まで歩いていっていると、カズが「あ」と声をあげた。

「そういえば、転校生が来るらしいぞ。今日山本が職員室から出てきたところを見たんだって」

「へえ、男子？ 女子？」

「男だつてよ」

「え、本当に!? どんな子？」

智香が目を輝かせる。元々恋愛漫画や小説が大好きな智香は、男子と聞いて嬉しそうだ。運命の出会いというものに憧れているらしい。楓は「ふーん」と興味なさそうに返事をするだけ。

「楓は気にならないのー? 転校生だよ、男子だよ」

「気にならなくはないけど、どんなやつか今はわかんないし」

「ちよーかつこいい男の子かもしれないよー」

そんなドラマティックなことがあるだろうか。

ふーん、ともう一度返事をして、ポケットに手をつっ込んで歩く。

中学生になってから、女子同士の会話には恋バナが増えた。誰が好きだとか、誰と誰が両思いだとか。それはクラスメイトだったり先輩だったりもするけれど、芸能人の場合もある。別にそれにも不満はない。

けれど、楓には、よくわからない。

恋をしたらどんな気持ちになるのかは、漫画などでなんとなくは知っているけれど、実際に自分だったらどう感じるのかは経験がないのでわからない。

些細なことに一喜一憂して、なんだか大変そうだなあ、と思ったりもするけれど、興味はある。

ただ、今のところ、男勝りの楓にとつて男子は自分によく似た身近な存在で、特別な感情を抱くことがない。男子に恋をする自分の姿なんてまったく想像できない。

はしやぐ智香を横目にそんなことを考えていると、カズが「あ、あと」と言葉を付け足した。

「明日から転校してくる奴のことかわかんねーけど、千里もこつちに戻ってきたらしいぞ」

「え!？」

声を発すると同時に、「千里」の幼いころの泣き顔が脳裏に浮かぶ。智香も「うそー!」と嬉しそうに声を弾ませた。

「千里くんが? 懐かしいー。楓も覚えてるよね?」

「もちろん! そうなんだ、千里がねえー。だったら楽しみかも!」

「楓は千里のヒーローだったもんな」

カズが昔を思い出して、からかうように笑った。

千里とは、楓たちと幼稚園が一緒だった同年の男の子だ。

大きな瞳に色白の肌で、女の子みたいにかわいい子だった。そのせいで男の子——主にあのころガキ大将だったカズ——によくからかわれバカにされていた。あと、よく転んで膝をすりむいて、顔を真っ赤にしながら泣いていたことも覚えている。

あのころは千里を守るのが自分の使命だと思い、楓はいつも千里のそばにいた。千里もよく「楓ちゃん」「楓ちゃん」と言つてあとをついてきた。

苦手なものなんてほとんどのない、怖いもの知らずの楓にとって他人の血だけが弱点なのは、転ぶたびに、ちよつと怪我をするたびに、わんわんと泣いていた千里を思い出すからだろう。千里はいつも、これ以上の痛みを知らないかのように、泣きすぎて死んでしまうんじゃないかと思うほどよく泣いた。

そんな千里を見ていると、楓はいつもなんとかしてあげたいと思つていた。自分が怪我をして血を流すよりもずっとずっと胸が痛くて苦しくなるのだ。自分では感じたことのない痛みに襲われる。

特に、今でも楓の記憶に鮮明に残っているのは、自分のせいで千里に怪我を負わせてしまった
ときのことだ。

バザーで賑わっている幼稚園のグラウンドでのこと。楓を探していた千里を見ていたずら心が
働き、背後から「わ！」と驚かせた。千里はびつくりしてそのまま地面に顔から転んだ。

そのとき、千里は風船を抱きしめていて、転んだ拍子にそれが割れて臉を切ってしまったのだ。
真つ赤な顔と、顎まで流れる血と涙。そして、響き渡る千里の泣き声。

すぐに病院に連れていかれた千里は、四針縫うことになった。

あの日のことを思い出すだけで、楓は目眩がする。

次の日、大きなガーゼと眼帯をつけてやってきた千里は、落ち込む楓に「大丈夫だよ、楓ちゃ
ん」と痛みに顔を歪めながら笑顔でなぐさめてくれた。それがかえって、楓には苦しく感じた。

そんな千里が引越していったのは、小学校に上がる直前のこと。

どんなふうにも別れたのかは記憶が曖昧だ。けれど、すごく悲しかったような気がする。とにか
く苦しくて胸が痛かったという思いがある。

離れてから七年。楓は千里のことを忘れたことがない。

千里が、帰ってくる。

どんなふうにも成長しているだろう。

楓は目をつむり、中学生になった千里を思い描いてみた。今まで何度も繰り返してきたことだ。整った顔立ちをしていたので、案外かっこよくなっているかも。いやいや、女の子顔負けの美少女のようになっていくかも。

想像すると、つい頬がゆるんでしまう。

自分が守らなければと思いつながら一緒にいたけれど、楓はただ、千里のことが大好きだった。血は苦手だったけれど、泣きながら楓にくっついてくる千里はかわいかったし、そのあとで見せる満面の笑みを向けられることも嬉しかった。

楓にとつて、千里は特別な、宝物みたいな存在だった。

——『千里の顔は夕焼けの色だね』

顔を真っ赤にして泣いていた千里に、そう言ってなぐさめたことがあった。だから、夕焼け空を見ると顔を真っ赤にして泣いて、笑う、千里のそんな姿を思い出す。

転校生が少し楽しみになってきた。

千里だったらいのに。そして、また幼稚園のころみたいに仲よくしたい。



中学二年生一日目。

楓と智香は一年に引き続き二年でも同じクラスになれた。智香以外にも、小学校のときの友人がたくさんいた新しいクラスは初日からいい雰囲気だった。

「いいクラスでよかったねー。楓も一緒だし嬉しい！」

「ほんとだなー」

教室を出たところで、智香が今にもスキップしそうな足取りで言った。

楓も智香と一緒に安堵していた。

智香の場合、かわいい見た目のせいで、女子から嫉妬されることが多い。男子の前でだけかわいく振る舞うなんてことはしないのに、陰でいろんなことを言われたりする。小学校のころは智香をかばって何度もケンカしたことがあるくらいだ。さすがに中学生になってからは、そんなことはほとんどないけれど。

「カズのところはどうだろうな。まあ、あいつだったら大丈夫か」

カズはふたつ隣のクラスに分かれてしまったが、きっと今ごろクラスの中心で、みんなを盛り

上げていることだろう。

「そういえばうちのクラスじゃなかったなあ、転校生」

「そうだね。どのクラスだったんだろー」

転校生が千里だったら同じクラスがよかったのになあ、と心の中でつぶやく。

今日は始業式で部活が休みのため、カズを迎えに行く。すると目的の教室からカズがひよっこりと顔を出してふたりを見つけるなり手を大きく振った。

「おい、ちよつと早く来いって！」

そう声をかけてくる。

楓と智香は顔を見合わせて、軽く首を傾げる。

「ほら！ こつちこつち」



「おい、やめろつて、なにするんだよ」

カズは教室の中から誰かをぐいっと引き寄せてふたりの目の前に連れてきた。

サラサラの黒髪に、長い睫毛にきれいな二重瞼。身長はカズよりも少し高い。黒縁メガネの奥から覗く視線には、クールな雰囲気があった。

不意に、楓の胸が小さくとくんと跳ねた。

「オレのクラスに来た転校生」

「へー！ 初めまして！」

思わずぼかんとしてしまう楓の隣で、智香が親しげに話しかけた。ハツとして「よろしく！」と楓も笑顔を見せた。

——けれど。

転校生はにこりともせずふたりを見つめるだけ。挨拶を返すこともない。そしてすぐにふいつと顔をそらした。

「あ、バイバイ」

なんだこいつ、と思っていると教室から出ていこうとする女子ふたりが転校生に向けて声をかけた。にもかかわらず、目の前の男はなんの反応もせず、カズだけが「おー、じゃあなあ」と明

るい声で対応している。

女子たちは返事のない転校生に対し、ちよつとむつとした顔をする。

「……お前、挨拶もできねえの？」

楓は眉間にしわを寄せて、無愛想な転校生をにらみつけながら言った。

誰だか知らないが、なんだかこの男は嫌いだ。

「……なんで返事しなきゃいけないわけ？」

「なんで返事しなくていいと思つてんの？」

「知らない人たちだから」

転校生があつげらんかんと言い放つと、女子たちの表情が凍りつく。

「いや、知らないはずないだろ。同じクラスじゃねえか」

「今日転入したばつかりなんだから、知らねえよ」

「同じクラスから出てきたし、知らなくても挨拶されたら返すのが当たり前だろ」

「なんなのあんた。こいつらの友だちなの？」

「ちがうけど」

言い合っていると、ふたりの横をさっきの女子たちが逃げるように通り過ぎていった。そのと

き、「やな感じだね」と言っているのが聞こえる。

転校生にも聞こえたのだろう、「ほら」と言っ、顎でくいつと彼女たちを指した。

「だから女なんか嫌いなんだよ」

「お前がそんな態度だから、女子だってあんな感じになるんじゃないの」

なにが女なんか、だ。

食いつく楓に、転校生は小さくため息をついてから、楓を観察するかのようじろじろと不躡な視線を向けた。

そして、バカにしたように笑う。

「あんた、あれだろ。泣いている子がいたら守ってあげなきゃ！ とか思っ、て男相手にも挑んでいくタイプ」

「当たってるじゃん」

そばにいた智香がこそりと耳打ちしてきた。

余計なことを言わないでほしい。

「おせっかいで、考えるよりも先に口と手が動く。つまり単細胞で無神経」

「はあ？」

ズケズケとものを言われて、イライラした気持ちがますますひどくなる。

「おれ、あんたみたいなの、嫌いなんだよね」

「なんで初対面でそんなこと言われたいけないんだよ！ こっちだって嫌いだよ、お前みたいなやつ！」

「そりやよかった」

む、ムカつく！

楓は拳をつくつて怒りにふるえる。転校生は涼しい顔をしているだけなのがまた気に入らない。

そんなふたりの間に「まあまあ」と入ってきたのはカズだった。

「千里もどーしたのお前。ほら、覚えてるだろ、楓だよ」

千里、という名前に呼吸が一瞬止まったのが自分でわかった。

「楓も覚えてるだろ、千里！ 昨日話してた例の転校生、千里だったんだよ」

カズはなぜか自慢げだ。

けれど隣に立っている転校生——千里は少し不満そうに見えた。

これが、千里。あの泣いてばかりいたかわいい千里。

けれど目の前の男にはそんなかわいらしい面影がひとつも残っていない。

智香も驚いていられるらしく、口をぽかーんとあけている。

「ああ、楓だったのか……どうりで」

千里のほうも、ようやくこちらのことを認識したらしいが、驚いている様子はない。ため息交じりのその声は、楓の記憶の中のそれよりもずっと低くなっていた。

すらりと高い身長。それに、低い声。ずいぶん変わってしまった。けれど、たったひとつ。変わっていないのは……右目の泣きぼくろだ。それを見つけて半信半疑だった楓はやっと、千里だと信じることができた。

と同時に、こんなにムカつくやつが千里だという事実を拒否したい思いにもかられた。いつそ、同姓同名の他人であってほしい。そう思いたいのは、千里の、冷たい視線と声のせいだ。

「相変わらず——男みたいだ」

「……は？」

「髪型だけは女っぽくなってるけど、適当にまとめてるだけって感じで、相変わらずガサツなんだろうなって」

冷たい視線はそのままに、にっこりとほほえみながらぺらぺらと毒をはく。

「……ああ、そう。そうかもな。あんたはずいぶん変わったみたいだな」

「おかげさまで」

「昔はちよつとからかわれるだけでびーびー泣いて、わたしの後ろをくつついてきたくせに」

「中学生にもなつて、まだヒーロー気取りかよ」

はん、と鼻で笑うように言われて、怒りが沸点に達する。

「な——」

「はい、やめやめ」

胸ぐらをつかんでやろうと思つたところで、

カズが間に割り込んできた。ふたりを交互に見

つめて「どつちもどつちだよ」と呆れたように笑う。

ふだんは、みんなの中心で悪巧みをしては周りを困らせたりからかったりするくせに、カズはたまにこうして大人のような面を見せる。そして、楓はそんなカズには弱かった。拗ねたように口を尖らしながらも、千里から一歩離れる。



「楓、もう帰ろう。こんな性格の悪い千里くんなんて知らないままでいいじゃん。クラスもちがうし」

智香が楓の腕を掴み、促す。

その途中でギロリと千里をにらみつけるのももちろん忘れない。さすがの千里も、あまりに鋭い智香の視線に一瞬たじろぐ。

カズがぼんつと千里の肩に手をのせる。

「ほんと、どーしたんだよ、千里。昔は楓になついてて、かわいかったのに」

「かわいいかわいいうるさいんだよ。七年も経てば誰だって成長するんだよ。あんたら三人はまったく成長してなさそうだけど」

カズの手を振り払い、千里が吐き捨てるように言った。

「久々に会ったのに冷たいなあ。せつかく再会したんだし仲よくしよーぜ」

千里が悪態をついても態度が悪くても、カズは気にする様子を見せずに話しかける。

「それが大きなお世話なんだよ。おれは会いたくなかった」

「なんでー？ オレはともかく、千里は楓と仲よかつたじゃん」

なあ、とカズに話を振られて、楓は「お、おう」と返す。すると千里はカズから楓に視線を動

かしてから、

「おれはずつと——楓みたいなガサツな女、大つ嫌いだった」

と言った。

楓の目の前に、記憶の中の千里はもう、いなかった。

「……こつ、こつちだつてお前みたいな性格悪い男は嫌いだったの！」

廊下中に響き渡るほどの大声で叫び、楓はつんと顔をそむけてずんずんと歩き出した。

むうつとしたまま校舎を出て無言で歩いていると、智香が「楓、元気だしてー」と声をかけてくる。

「でも、すごい嫌な感じだったよね、千里くん。ちょーつとかつこよく成長しちやったからって、あんなに性格悪くなるなんてねー」

「教室でもずーつとあんな感じだったんだよなあー」

ギヤハハ、とカズが笑いながら言う。

わかっていたなら、なぜわざわざ千里を楓の前に引きずり出したのか。どうせふたりの反応を見て楽しみたかったのだろう。

それにしても、いつたいなにがあつてあんな性格になつてしまつたのか、さっぱりわからない。

楓ちゃん、楓ちゃん、とうるんだ瞳で名前を呼ぶ千里の思い出。

宝石のようにキラキラ輝いていた過去が、ガラガラと音を立てて崩れていく。

七年会わないだけで、人つてあんなにも変わるものだろうか。

「……わたしの思い出を返してほしい」

とりあえず、楓はもう二度と千里と話さないことを心に決めた。思い出の千里を汚されるなんて

たまつたものではない。あの男は千里ではない、と自分に言い聞かせる。

「おせっかいな楓にそんなことできるわけないじゃん」

決心を口にする、カズはそう言つてまたギャハハと笑い、智香もその言葉を否定せずにやん

わりと呆れたように笑うだけだった。

「おかえり、楓。ねえ、千里くんは学校で会つた？ 今月からこつちで暮らすんですって」

家に帰るなり、お母さんが嬉しそうに話しかけてきた。今日行つたスーパーで千里のお母さん

と出会つたらしい。

千里の名前を聞いて顔をしかめる楓に、お母さんが首を傾げた。

「なあに、その顔。仲よかったでしょ、千里くんと」

「……そう思っていたのは、わたしだけだったみたい」

ダイニングテーブルの椅子に座り、机に突っ伏しながらつぶやいた。

楓だって、今日あんなことを言われるまでは、千里と仲がいいと思っていた。いつつも一緒に過ごしていたし、少なくとも楓は千里のことが好きだった。千里も楓の後ろを追いかけてきていたから、嫌われているとは思わなかった。

千里はもう、あのころのかわいい男の子ではない。かつこいい男子だ。それは楓も認める。だつて一瞬ときめいてしまったのだ。

でも、あんなによく泣き、よく笑っていた千里が、まるで氷のように冷たくなってしまったなんて。まさかあんなに性格が悪くなっていたただなんて。

昔の面影は泣きぼくろだけ。

——『中学生にもなつて、まだヒーロー気取りかよ』

——『楓みたいなガサツな女、大っ嫌いだった』

思い出しても腹が立つ。それ以上に、シヨックだった。

あのころ楓に見せてくれた、満開の花のような笑顔の裏で、千里はずっと自分のことが嫌いだ

ったのかと思うと、悲しくて悔しくて、惨めだ。

——『楓ちゃん、ぼくは』

脳裏によみがえる、千里のまつすぐな眼差し。

あれはたしか、幼稚園の裏庭だった。なにを話したかは覚えていないけれど、あのとときの千里はとびきりかわいかった。

楓は思わず泣いてしまいそうになるのをぐつとこらえた。

そして頭を振って悲しみを追い出し、心の中にある怒りだけに集中する。

あんなやつは千里ではない。

「ただーいま」

玄関からお兄ちゃんの声が聞こえた。

「あら、稔も早かったのね」

「今日部活なかったから。よ、ただいま楓、お前も帰ってたのか」

「おかえり」

隣の椅子にどかりと腰掛けたお兄ちゃんに、そっけなく返事をする、「機嫌わりい」と呆れたように言われた。

「ほら楓も稔も、ちゃんと制服脱いできなさい。シワになるでしょ」

「楓、これも一緒にハンガーにかけといてくれよー」

「なんでだよ、自分のことは自分でやれよ」

渡されたブレザーを文句と一緒に投げ返すと「楓、言葉遣いが悪いわよ！」とお母さんに叱られた。お兄ちゃんも同じような言葉遣いなのに、楓だけが叱られる。

それを見たお兄ちゃんが「叱られてやんの」と笑うものだからついばかりとお兄ちゃんの肩を叩いた。

「暴力反対ー。ほんと楓はいつまで経っても女の子らしくなんねえなあー。ガサツだし」

今の楓にとつての禁句ワードだ。

もう一発叩いてやろうかと思っただけで「楓、いいから着替えてきなさい」とお母さんに止められてしまった。

お兄ちゃんと小競り合いをするのも面倒なので、腰を上げて自分の部屋に向かうと、背後からお母さんが叫ぶ。

「楓、明日はちゃんと女の子らしく過ごしてね！」

そうだった。明日は親戚の集まりがあるんだ……。

思い出して、気分が下がる。

明日は、七十七歳になるおばあちゃんの誕生日だ。おばあちゃんのこととは大好きだし、いことや伯父さんたちのことも大事に思っている。ただ問題は、その日だけはおしとやかに過ごさなければいけない、ということだ。

おばあちゃんは、ずっと娘を欲しがっていたらしいけれど、四人生まれた子どもは全員男の子だった。ちなみに、その末っ子が楓のお父さんだ。その後、たくさんの孫にもめぐまれたけれど、女の子は楓だけ。なので、おばあちゃんは孫たちの中でも特に、楓をかわいがってくれる。たったひとりの「女の子」として。

誕生日のプレゼントや、クリスマスにもらうのはピンクやパステルカラーのひらひらした服だったり小物が多い。楓の趣味ではないけれどおばあちゃんが喜ぶので、会いに行くときはできるだけ身につけるようにしている。

お団子を解けば胸元まである長い髪の毛もおばあちゃんのためだ。本当はショートカットにしたいけれど、小学四年生に進級するタイミングでばっさり切ったとき、おばあちゃんはほんの一瞬悲しそうな表情を浮かべた。その日進級祝いとしておばあちゃんが用意していたプレゼントは、バレッタだったのだ。

それから楓は髪の毛を伸ばしている。

「おばあちゃんには会いたいけどなあ……」

女の子っぽい格好をするのは、昔ほど苦ではない。最近はピンクもレースも嫌いではなくなってきたし、素直にきれいだとかかわいいとは思う。ただ、自分には似合わない気がして落ち着かないのだ。

おばあちゃんの家には車で向かう。帰りも車ならばいいのだけれど、両親は毎回お酒を飲んで一泊する。お酒を飲んでいる親戚と一緒に泊まるのは嫌だった。酒臭いし。それに二日間も慣れない服装で過ごすのはさすがにストレスを感じる。だから、楓とお兄ちゃんはいつも夕方くらいに電車で先に帰宅することになる。

けれど、帰宅するまでの間が問題なのだ。

ふだんとちがいで、女の子らしい格好をした自分の姿を、知り合いには見られたくない。誰か見ていないだろうかとまわりを気にしながら家までの帰り道を過ぎさなければいけないのだ。

もし誰かに目撃されたらからかわれるであろうことは目に見えている。一度、カズと智香に見せたときは、ふたりとも目をまんまるにして、そのあと大爆笑した。

自分の部屋で制服を脱ぎ、部屋着に着替える。姿見に映るのは、男勝りの自分だ。

もう少し女の子らしく振る舞えば、かわいい格好も似合うのだろうか。
そんな自分だったら、千里に嫌いだなんて言われなかっただろうか。

「なんてな」

考えても仕方のないことだ。

ぶんぶん頭を振って、制服を脱ぎ散らかしたままベッドに倒れ込んだ。



次の日。楓は朝早くから車に乗っておばあちゃんの家に向かった。

いつもは邪魔にならないように適当にお団子にしている髪も、今日はおろしたまま。腰にリボンのついたスカートと、花柄の刺繍の入ったカーディガン。コーデイネートはお母さんが担当することになっていたので、楓は差し出された服に袖を通しただけ。

昼前におばあちゃんの家に着いて、続々と集合してくる親戚たちとお昼ごはんの用意をする。

ふだんは家で家事なんてまったく手伝わない楓も、おばあちゃんの家でだけは台所に立って慣れない包丁を握る。庭やリビングで楽しそうに遊んでいるお兄ちゃんやいとこたちを羨ましく思

いながらも、おばあちゃんの嬉しそうな笑顔を見ると休憩するわけにもいかなかった。毎度のこととはいえ、つまらない。

こつそりと唇を尖らせながら、準備を続ける。そばにいた伯母さんがお母さんに「楓ちゃんみたいなかわいい女の子が手伝ってくれるなら、毎日のごはんの準備も楽しいんでしょね」と話しかけていた。お母さんはちよつと顔をひきつらせながら「ええ、まあ」と歯切れの悪い返事をする。きつと内心「だつたらいいんだけど」と思っていることだろう。

料理の手伝いが終わったら、配膳もしなければならぬ。

「楓、気をつけて運ぶのよ」

「うん。このお皿も持つていっていいんだよね」

当然口調だつて乱暴な言葉を封印してしゃべらなくてはならない。

なんだか、わたしがふたりいるみたい。

おばあちゃんの家に来るたびに、楓はそんなことを思う。いつもの自分とは、真逆の自分。不思議なのは、ふだんの自分を隠すように過ごすこの時間も、男の子に混ざって遊べないことを除けばさほど苦痛ではないことだ。かに股を意識して内股にすることだけは、内ももがふるえるほど筋肉を使うのでつらいけれど。

お昼ごはんの準備が整うと、全員でおばあちゃんの誕生日を祝った。

楓とお兄ちゃんを選んでプレゼントを渡すと、おばあちゃんはすごく喜んでくれた。

ごはんを食べ終わるころには、両親や伯父さんたちはすでにビールを飲み始めていた。昼食の片づけも終わったし、そろそろ帰ろうかと楓は立ち上がる。

「お兄ちゃん帰らないの？」

いとこたちと一緒に、携帯ゲーム機に夢中になっているお兄ちゃんに声をかけると「もうちょっと」と顔を上げもせず返事をされた。通信対戦で盛り上がり上がっているらしい。

いつまで待たされるのかわからないので、楓はお母さんに「先にひとりで帰る」と言ってからおばあちゃんにも挨拶をして家を出た。

自宅までは電車で一時間ほど。靴ずれにならないだろうかと気にしながら駅に向かって歩き始める。あまり電車が混んでいなければいい。

快速急行を降りて、このへんで一番大きな駅で地下鉄に乗り換える。改札を出て駅前の交差点を横目に見ながら数百メートル先の階段を目指して歩いていると、視界の隅にふと気になる人影を見つけた。

この人混みの中で、どうして気づいてしまったのか、自分でも驚くほど自然と目が吸い寄せられた。

「……千里？」

足を止めて小さな声で彼の名前を呼ぶ。もちろん彼に聞こえるはずはない。

メガネをしていないけれど、遠目でも、まちがいになく千里だとわかった。広い交差点の前で、きよろきよろしながらひとりのおじいさんと話している。手には小さな紙。

おそらく、道を聞かれたのだろう。

この駅周辺は、ここ数年でいろんな建物ができたせいで、どんどん複雑になっている。すごくわかりづらく、楓も、昔は乗り換えるだけでもひと苦労だった。

幼いころはこのへんに住んでいたとはいえ、戻ってきたばかりの千里には、ダンジョンのような場所だろう。

そんな場所で道を聞かれ、わからないだろうに必死に力になろうとしている千里は、楓の記憶の中の優しい千里と重なった。それが嬉しくて、楓は柱の陰からこっそり千里を見つめる。

しばらくすると、おじいさんは千里に二言、三言なにかを話して去っていった。おじいさんの背中に向かって、千里はべこべこと頭を下げている。

どうやら道案内はうまくいかなかったようだが、おじいさんが向かう先には交番があったはずだ。千里が伝えたのかもしれない。

とりあえずはなんとかなった、ようだ。

ほつと胸をなでおろし、改めて帰ろう、と思ったところで今度は千里が不安そうな顔であたりを見渡していることに気がついた。

千里もどこかに向かおうとして迷っていたのだろうか。

「なにしてんだよ……」

千里の様子に思わず楓はひとりごちた。

おじいさんと一緒に交番に行けばよかったのに……。

これでは帰るに帰れない。気づかなければこのまま立ち去れたのに。

楓は見なかつたふりができるような器用な性格ではない。どちらかと言えばおせっかい。自分でもそれはわかつている。千里にヒーロー気取りと言われたくらいだ。

これがほかの知り合いだったら迷わず声をかけただろう。だけど相手は千里だ。おじいさんに接していた姿から昔の千里を思い出して懐かしく感じた。だからこそ、楓が話しかけた途端、しかめっ面を向けられたらシヨックだ。

いや、それよりももっと大きな問題がある。

今の楓は知り合いには絶対見られたくない格好をしている。

それを思い出すと、ますます声をかけにくくなり頭を抱えた。

学校でのイメージと真逆の女の子らしい格好を千里に見られるわけにはいかない。髪の毛だっ

ておろしているし、リボンにスカート。誰だお前、って思われるだろう。

——と思ったところで、ハッと気づいた。

今日の楓はいつもとまったく雰囲気がちがう。男勝りだなんて誰も思わないだろう。後ろ姿だ

けなら楓だと気づく人もいないはずだ。

「バレないんじや……」

こう、走って行って、背を見せたまま話しかければ。声もちよつと変えてみれば……。

なんて、うまくいくはずがない。むしろそこまでしてバレてしまったら恥ずかしいことこのう

えない。

やっぱり見なかったことにしよう！ そう決心して踵を返した瞬間、

「あつぶねえな！」

と、おじさんの声が聞こえてきた。

振り返ると、千里が通りすがりのおじさんに頭を下げている。

それを見ると、楓は考えるよりも先に駆け出していった。

気がついたときには千里の腕をがっしりと掴んでいる。驚いた千里がこちらを見るのと同時にさつと俯いて、かろうじて千里から顔が見えない姿勢を保つ。とはいえ、やつぱりバレるかもしれない。冷や汗が頬を伝う。

「え、と？」

とまどった千里の声が聞こえなかったかのように、くるりと背を向ける。そしてふだんの声よりも一オクターブほど高い声で（実際に変わっているのかは自分でよくわからないけれど）「どこに行きたいんですか」と聞いた。

「え？ えつと」

「道に迷ってたんでしょ？ 案内するからどこに行きたいか教えて」

少しでも気を抜いてしまうと普通にならぬので、早く答えてほしい。

楓が急かすように聞くと、千里は「あ、あの家電量販店に……駅前にあるはずなんですけど、見つからなくて」と答えてくれた。

このへんの家電量販店といえは一軒しかない。たしかに駅前にはあるのだけれど、今いる場所

からは、駅を挟んでちょうど反対側にある。千里が引越している間にできた店なので、わからなかったのだろう。

ぐいっと千里の手を引いて、楓は駅の中を歩いていった。

駅を突っ切りデパートの横を通り過ぎると全国チェーンの家電量販店につながる歩道橋が見える。なにも言わずに歩き始めた楓に、千里は黙ってついてきてくれた。

駆け足気味に突き進み、ようやく目的の建物が見えてきた。そこで楓は足を止めて、千里のほうを見ることなく、すつと指をさす。

「あそこ」

「え？ あ、ああ」

楓はすぐに「じゃあ」と千里から数歩離れた。

これ以上、一緒にいるわけにはいかない。今は気づかれていないみたいだけれど、いつバレるかわからない。早くここから立ち去らなければ。

背を向けて一歩踏み出したところで、「あの」と手を掴まれ引き留められた。

「ありがとう……！」

「……え？」

大きな声でお礼を言われ振り返ってしまい、まっすぐに楓を見つめる千里と視線がぶつかった。さすがに真正面から顔を見られたら、バレる。

あ、まずい……！　と思っただけれど、今さら顔を隠してももう遅い。

「あ、いや、これは……」

なにを言うべきか、頭をフル回転させる。

こんな格好をしている理由？　それとも、だますようなことをしてしまったことの言い訳？　頭の中でぐるぐると考えを巡らせていると、

「目が悪いから、まわりがよく見えなくて……助かった、です」

と言っただけ千里は軽く頭を下げる。

よく、見えていなかった？

千里の言葉をゆっくり頭の中で繰り返してから、ぱっと顔を上げた。

たしかに今の千里はメガネをかけていない。けれど、この距離で楓だと気づかないほど視力が悪いとは思わなかった。

なんだ……そうだったのか。

緊張の糸が切れて、楓はつい「ふはは！」と笑ってしまう。

「目が悪いなら、メガネかけないと不便でしょ」

「……それは、そうなんだけど」

頭をかきながら目をそらす千里の頬が赤く染まっっていく。その表情は、楓の知っている千里だった。すぐ赤くなる、かわいい千里。

「顔、真つ赤」

「——う、うるさいな！」

ついぼろつと言葉をこぼしてしまうと、千里はムキになって顔を上げた。とはいえ、頬は紅潮したままだ。それが余計にかわいく見える。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない」

肩をすくめながらもつつい、頬をゆるめてしまう。

変わってしまったと思つた千里の変わっていない姿を見て嬉しくて仕方がない。

とはいえ、あまり笑つてしまうと彼がふてくされてしまいそうな気がする。現に目の前の彼は口を尖らせてそっぽを向いてしまった。なんとかフォローしなければ。

「恥ずかしかつてなにも言わずにどこかに行く人よりも、顔を赤くしてでも、気持ち伝えてくれる人のほうが、ずっといいよ」



「え……？」

「顔が赤くなるのは、キミが恥ずかしいことから逃げないからだよ」
こんな言葉で納得してくれるのかはわからないけれど、彼の表情を見ると、少しだけやわらい



でいるようだった。千里にバレないように、ほっと胸をなでおろす。

その直後、千里がなにかをつぶやいたような気がして「え？ なに？」顔を上げると、千里は「や、ありがとう、て……」と、恥ずかしそうに顔を手で隠しながら言った。

昔と同じようにかわいい……だけどそれだけじゃない、成長した千里の表情に、楓の中で今まで抱いたことのない感情が、小さな明かりのようにぼっと灯る。

そんな気持ちに気づかないふりをして、楓は「あ」と空を指さした。

「ほら、もうすぐ空も、キミの顔と同じ色になる」

ゆつくりと太陽が傾き始めている。

まもなく、青い空にゆつくりと赤い色が滲んでいくだろう。

再び千里が楓に視線を戻したのを確認して、楓は「ね」とにんまりと笑った。すると千里は頬を夕焼けみたいに赤く染めながらはにかむ。

なんだ、そんな顔もできるんじゃない。

楓にも、千里の色が移ったのか、ほのかに頬に熱を帯びるのを感じた。

けれど、

「よく考えたら、その声……どこかで聞いたことがあるけど……」

と千里が言い出したので、楓の体がギクリとふるえる。

そういえば、途中から声色を変えるのを忘れてしまっていた。

そんなことを考えている間にも、千里が目を細めて楓の顔を認識しようとじつと見つめてくる。あからさまに目をそらせば怪しまれてしまうかもしれない。

いや、すでにうつすらと楓であることを感じているかもしれない。

すぐさま返事ができなかったことで、千里はきつともう怪しんでいるだろう。

どうしようどうしよう、とぐるぐると考えを巡らせていると「楓？」と千里の唇からこぼれる。

そして、みるみるうちに、千里の顔が歪んでいく。

学校で見たムカつく千里だ。

さつきまでいい感じで話してくれたにもかかわらず、相手が楓だとわかっただけでそんな顔をされてしまうことに、ムカつく。

だから、つい。

「楓を知ってるの？ わたし、楓のいとこなの」

そう、言ってしまった。